

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.38

発行 2002.3.31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 秀島辰美

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100番地1
TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

印刷所 山口印刷株式会社・伊万里市



そめつけいちょうもんおおざら
染付銀杏文大皿

館蔵資料

鍋島藩窯

1690～1720年代

口径 30.6cm

高さ 8.0cm

木盃形をした染付の尺皿。見込みに二本の銀杏の木を描く。銀杏木の間に「すやり霞」が描かれる。銀杏の葉は一枚一枚丁寧に濃み塗りされ、濃く塗るものと薄く塗るものと二つある。すやり霞には濃淡がつけられている。裏面は三方に七宝結び文を配する。高台外面には櫛歯文が廻らされている。

寄贈記念展のお知らせ

「柴田コレクション展 パートⅧ－18・19世紀の有田磁器－」

○ 趣 旨 平成2年から始まる柴田明彦・祐子夫妻の寄贈による柴田夫妻コレクションは、これまで7回におよぶ展覧会を開催して紹介してまいりました。このたびは、最後の寄贈記念展として新たな寄贈品により、海外輸出が盛んだった17世紀後半にかわって国内向けの様々な製品が作られ、再び海外輸出が復活する激動の18・19世紀の有田磁器の歴史の変遷を追う展覧会を開催いたします。

- 主催および会場 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会 期 平成14年10月4日(金)
～12月1日(日)
59日間 会期中無休
- 出品点数 約500件1300点
- 展示内容 江戸中期から幕末・明治期までの有田磁器および中国など他産地の製品
- 観 覧 料 大 人 620円(510円)
大学生 300円(200円)
高校生以下および障害者の方は無料
※ () 内は20名以上の団体
- 図 録 展示品を掲載した図録を刊行する。



色絵菱割唐草文蓋付鉢
有田 1700～40年代



染付鳳凰舟人物文菊花形皿
有田 1700～40年代



色絵青磁布袋置物
有田 1730～60年代



染付唐花唐草文把手付皿
有田 1790～1840年代

平成14年度

「新収蔵品展」のお知らせ

- 期 間 9月3日(火)～9月16日(月)
 ○内 容 平成13年度に購入・寄贈により新に収蔵した作品を紹介いたします。今回は鍋島の大皿や輸出された古伊万里の他、熊本や鹿児島はやきものも展示いたします。また、元禄柿と呼ばれる色絵の名品もあります。
 ○展示数 34件71点
 ○場 所 第1展示室



色絵山水文壺
有田 1700～40年代



染付山水文水指
有田 1610～30年代



色絵牡丹唐草文蓋付鉢 工藤吉郎氏寄贈
有田 元禄8年(1695)

寄贈記念－佐賀藩武家伝来の鍋島・古伊万里－
西コレクション展

- 期 間 9月18日(水)～9月29日(日)
 ○内 容 平成13年度に寄贈された佐賀藩士中野家旧蔵の鍋島や古伊万里などの陶磁器を御紹介します。中野家は初代有田皿山代官だった山本神右衛門重澄や「葉隠」を残したその息子山本常朝に関係する家柄で、江戸時代の上級武家の陶磁器として貴重な資料です。
 ○展示数 60件193点
 ○会 場 第1展示室



染付毘沙門亀甲文皿
鍋島藩窯 1750～90年代



染付萩文皿
鍋島藩窯 1770～1800年代



色絵万年青文皿
鍋島藩窯 1850～90年代

北前船と肥前陶磁流通調査報告

当館では、江戸時代の国内流通に関する調査研究を進めてきましたが、今回は日本海側のいわゆる北前船により運ばれた古伊万里の流通調査を行うため山陰・北陸・東北を対象に調査を行いました。

以下はその中の新潟県佐渡島から上越・新発田周辺・山形県酒田市の調査記録です。



船から見た両津港

3月11日の佐渡航路はしけていました。ジェットフォイルで新潟港を出港しておよそ30分もすると遠くに佐渡の暗い島影が見えてきます。時速80kmの高速船は島をたちまち引き寄せます。思ったより高い山々が見え、やがてそれらのどれもが冠雪していることがわかりました。「島一周が200kmもあるんだ。」シャッターを切る吉永課長の声がありました。

出港して1時間、14時ちょうどに二人は初めての佐渡・両津港に上陸しました。佐渡の交通手段はレンタカー。早速車に乗り最初の訪問先の両津市郷土博物館に15時前に着きました。野口学芸員に両津市の真木城址の出土遺物を見せていただきました。主体は16世紀とのことでしたが、数十点の唐津・伊万里の陶片があり、特に唐津の胎土目段階のものが目立ちました。ただし、近世以降は城ではなく農地などになったため小片が主体でした。両津が佐渡の中心として伸びたのは明治以降であり、近世は金山と奉行所のある相川や北前船の寄港地として栄えた小木が大きかったと野口さんに教えていただきました。

翌12日は相川町の佐渡金山遺跡調査整備室で佐渡奉行所跡の膨大な出土遺物を見せていただきました。17世紀前半から唐津・伊万里が沢山ありましたがやはり、上手の物が多く見られました。調査室の斉藤氏と滝川氏に大変お世話になりましたが、地元の佐藤利夫先生も朝から同席され調査室の後も奉行所や佐渡金山まで、この日は終日案内していただき予想以上に充実した1日になりました。

13日は快晴でした。9時には相川郷土博物館で柳平

氏のお世話になり町内の出土品の調査からスタートしましたが、この日も佐藤利夫先生が付き添われ、真野町の資料や小木町の佐渡国歴史民俗資料館、宿根木の町並み保存地区や小木港、二見浦、沢根など北前船寄港地の案内など15時30分の両津港の出港時間を見ながら食事抜きでギリギリまで同行して御指導いただきました。このように、丸二日間の佐渡調査は、訪問先の皆様のお陰で予想以上の充実した調査ができました。



高田城西堀から妙高山系を望む

3月14日は豪雪の上越も例年にない暖冬で町中を歩くと汗が出るほどでした。それでも真っ白な妙高山系は青空に映え美しいばかりでした。上越市の整理事務所で豊臣秀吉の重臣堀秀治が慶長5年（1600）に築城し、慶長19年（1614）に廃城になった福島城の出土遺物を見ましたが肥前は唐津ばかりで伊万里はありませんでした。つぎに福島城にかわり徳川家康の六男松平忠輝が慶長19年に築城し、明治3年（1870）に火災により消失するまで続いた高田城の出土遺物を調査しました。唐津は砂目積み段階がほとんどで、初期伊万里は少量でした。17世紀後半では南川原山の上手製品や青磁の三足付皿が3点もありました。また、直江津駅に接した、伝至徳寺跡からは山瀬窯や岸岳系の唐津や絵唐津などが出土していました。13時には上越市文化財係の小島幸雄氏と中西聰氏の案内で市内の雁木作りの町並みや上杉謙信の春日山城などを大急ぎで案内していただき、14時10分発の北越5号で新津駅まで北上しました。

新津では江戸時代から続く豪農、伊藤家の北方文化博物館の調査が目的でした。タクシーを飛ばして15時50分に着くことができましたが、業務課長の岡本氏に御挨拶をするのが早いか別室へ案内されました。途中の展示場に江戸期や明治期（肥後軒喜三製）の高級食器が並んでいました。御所蔵品を見せていただきましたが、いつごろからの所蔵かは不明とのことでした。伊藤家は明治以降に地主として拡大し、昭和期には新潟県下第一の地主だったそうで、岡本氏の御案内で明治15年から8年の歳月をかけて作られた建坪1200坪、

部屋数65の本邸を見終わったのは閉館時間を大きく超過した16時50分でした。

3月15日の朝は小雨でしたが、ホテルからタクシーに乗ると8時45分には会津街道沿いに建つ東北民藝館、豪農肥田野邸の前に着いてしまいました。アポイントをとる時、10時開館を無理に9時に御願した手前、さすがに軒先で雨を避けていたら出入りの職人さんが、門の横の呼び鈴を押さないかとアドバイスしてくれました。恐る恐る押すと聞き覚えのある上品な女性の声が出て、すぐさま玄関が空き、件の女性が御主人の肥田野才之丈氏といっしょに出迎えてくださいました。肥田野家は現在の新発田市米倉に延宝年間より続く旧家で、代々の御当主は才之丈を襲名とのこと。まずは展示を案内していただきましたが、御当主は所狭しと並ぶ家具、衣類、食器、灯火具、信仰具、農具にいたるまでの展示品をそれぞれの道具が使われた状態がわかるように保存したいとの強い信念で肥田野家伝来品は元より、新潟や山形県内から収集されているそうです。最初に感心したのが、伊万里の煙草盆のセットでした。普通の美術館では火入や灰吹きなどは別々の焼物として展示されることが多いのですが、こちらでは今使っているように灰も入りヤニも付いた状態で畳の上にいくつも置いてありました。また、江戸後期の伊万里の小瓶を対で供えた神棚を沢山みました。しかし、もっとも驚いたのが普通、整髪用の椿油



灯明として使われた油壺

入れと考えられている江戸後期頃の油壺が口に灯心を入れ燭台に固定され、そのまま灯明具として使われていることでした。このように、この東北民藝館は民藝というより、東北の習俗や歴史を体現する民俗館だと感じました。もちろんこれ

だけではなく、最後は数百点の古伊万里を一堂に並べた展示室でした。この中には伝世品の極めて少ない砂目積み最初期段階の伊万里が有り、佐渡の伝世であったことをはっきり教えていただきました。膨大な資料を見終えたころには12時50分発の秋田行きの特急の発車時間が迫っていました。

と言われたほどの豪商だったそうです。本間美術館はその別邸で庭園とともに公開されています。旧本邸は時間の都合上中には入れず外からだけの見学でしたがいずれ劣らぬ豪邸でした。

3月16日は酒田市立資料館を最初に訪ねました。同館の佐藤昇一氏の案内で発掘資料や館蔵品などを効率良く調査させていただきました。中でも展示されていた17世紀の大皿の優品や、江戸後期の大皿に藁の梱包材が残っていたのが印象的でした。そして、資料館の後は佐藤氏の案内で国史跡として公開されている江戸時代の廻船問屋鑑屋の見学と酒田に残る最も古い焼物屋である萬屋さんに行きました。萬屋さんには現代の有田焼や九州の焼物が沢山展示販売され、それらを拝見し終えたころちょうど12時になり、萬屋さんを失礼しました。佐藤氏とも別れて河村瑞賢の像がある日和山公園に上ることにしました。「今日は昼抜きだ。」吉永課長の声に気合いが入ります。実は佐藤氏の御配慮で14時に本間美術館で資料を拝見することになったのです。その前にこの公園で酒田港や酒田港を開いた河村瑞賢像の写真を撮るのが目的です。今日は幸い雨も上がりました。ほどなく高台の公園につき最初に目に付いたのが「常夜燈」の彫りのある石製の灯台でした。文化10年(1813)建立との説明板を見た後、早速フライン



常夜燈

ダーをのぞくとなん

と台石に刻まれた寄進者の中に「肥前佐嘉波根五兵衛」の名前がありました。衆知の事実なのかもしれませんが、調査最終日に肥前佐嘉の文字に出会うとは大きな驚きでした。河村瑞賢像も無事に撮影し、14時に本間美術館を訪ねました。美術館では高瀬靖晴館長と田中章夫主任学芸員の応対を受け色々とお話しをお聞きしました。以上をもって新潟から山形までの北前船と古伊万里の調査は終了しました。

今回の調査で一番強く感じたのは、現地伝世資料の大切さでした。流通をテーマにした調査では確実にその場所に残っていた資料は一級資料です。九州陶磁文化館所蔵品と同等のものも沢山ありましたが、違うのは当館の資料がどこの伝世かほとんどわからないのに対し、今回各地で見せていただいたものの大半は伝世地や家までがわかる資料で、その意味では一級資料だったといえます。今後は、御世話になった方々の御協力をさらに仰ぎ所期の目的が達成できるように努力したいと思います。(家田 淳一)

平成13年度寄贈記念展報告

「柴田コレクション展パートⅦ
—17世紀、有田磁器の真髄—」

平成13年10月19日から12月16日までの59日間、「柴田コレクション展パートⅦ」を開催いたしました。当展覧会は、平成2年のパートⅠ展以来6回にわたり開催されてきました。毎回、単なる御披露目展ではなく独自のテーマに基づいて行われてきましたが、今回は、有田磁器が最も輝いたといえる17世紀に着目し、1有田磁器のあけぼの、2皿山改革と磁器生産の本格化、3めざましい技術革新-色絵のはじまり-、4海外輸出時代の幕開け、5技術と美の完成、6中国磁器からの脱皮と和様の意匠の盛行、の6コーナーにわけて展覧されました。今回の展示総数は575件1190点という当館の通常の企画展の2～3倍の作品が一堂に並べられ、まさに見るものを圧倒する感がありました。また、数だけでなく名品が揃い、特に初期色絵の大皿や寛文～延宝時代の染付大皿や変形皿は玄人を含めた観覧者の方に好評を博しました。

会期中、観覧者に展示作品の中から自分の好きな1点を選んで投票していただく「私の選ぶナンバーワン」と題した人気投票を行いました。予想以上の反響で福島、三重の二県を除く各都道府県と海外からの来館者の1490票もの投票を得ることができました。投票数が入館者数の割合をそのまま反映しているわけではありませんが、この結果から改めて柴田夫妻コレクションひいては有田磁器が全国の方々から愛され、来館していただいていることがわかりました。人気投票ナンバーワンだったのは以外にも染付蝶文蝶形皿という小型の変形皿で、初期色絵や寛文～延宝期の大皿を押さえて173票を集めました。また、1票以上の得票があった作品は302点もあり、観覧者の好みが如何に多様で个性的であるかが伺われました。

また、10月20日には柴田明彦氏と大橋康二副館長による『柴田コレクションの魅力をさぐる』と題した記念対談を当館講堂で開催したところ約200名の聴講者がありました。この記念対談は柴田夫妻コレクション自体に対する疑問に加え収集者である柴田御夫妻についても御本人にザックバランにお聞きしようとした企画でしたが、最初にコレクションされた作品や御自身が特に好きな作品などが紹介されるなど興味深い話が続きました。

開会式には辻公也氏による記念茶会も行われ、59日間の会期中に15,750名の入館者があり好評のうちに閉会を迎えました。



開会式における柴田御夫妻あいさつ



開会式記念茶会の亭主辻公也氏と関係者



「私の選ぶナンバーワン」の作品



展覧会入場一万人目の方への記念品贈呈

柴田コレクション展パートⅦ記念対談報告 「柴田コレクションの魅力をさぐる」



10月20日の13時30分から15時まで、当館講堂で柴田明彦氏と大橋康二副館長により上記の記念対談が行われました。柴田コレクションの著名さに比べ、収集者である柴田御夫妻のことを知る方は少なく、柴田コレクション自体の質問と同じくらい御夫妻に対する質問がよくあります。今回はこれらの両方の質問に柴田明彦氏御自身にお答えいただく企画をしました。まず、前半は大橋康二副館長から「コレクションをする最初のきっかけ」と「一番最初を買われた作品は何んですか」という質問が行われました。これに対する柴田氏のお答えは、大学時代に外国人相手のお土産屋で食器として使う目的で買い始めたのが最初であり、最初にコレクションとして買ったのはパートⅠ-198の染付変形皿であったということでした。その他柴田コレクションは何故膨大な数を有しながら無駄のないコレクションが作りえたのか、ということなどが話し合われました。

15分の休憩中に聴講者の方々から募集した質問用紙をもとに話は再開しました。最初は「江戸時代の有田磁器が使われていた時代背景について興味がありますか。」という質問



柴田明彦

でしたが、それに対して「やきもの自体より、むしろそれらが作られたり使われたりした時代背景に関心がある。」というお答えでした。次に「九陶に寄贈された以外に自宅に何点ぐらいのコレクションがありますか。」という質問が出されました。この質問は我々もよく聞かれるものですが、それに対して「ありません。」との回答があり、会場に小さなどよめきが起きました。「財産とか、物とか、そういうものは生きている間は人から預かっているものだ、と、共有物であるという発想がありますから、ひとたび寄贈しようと思

った以上は1点も残さない。ですから、1点も家にはありません。全部寄贈いたしています。」との言葉が続くと、今度は感心したようなため息が聞こえました。また、「最初のコレクションの3000点ぐらいを自宅にどのように置かれていたのか。」という質問がありました。それに対して「一つの押入れに全部入れていた。」との答えに、会場は信じられないやら感心するやらの顔になりました。次の「今の古伊万里ブームをどう思われるか。」との質問には「今が古伊万里ブームかわからないが」と前置きされ、昭和30年代から現在に至る古伊万里収集の流れを説明され「気に入ったからいいんだという尺度が昭和48年を境に(値段が)いくらかだからいいんだという尺度にかわった。」と総括されました。その後古九谷論争についての質問などが続き、最後にこれまでの収集の過程で思い出の作品、好きな作品をスライドを使って御説明いただきました。5点の作品が紹介されましたが、柴田氏自身のセレクトということでは会場は皆興味深く説明に聞き入りました。

膨大な柴田夫妻コレクションを目にして誰もが思い浮かべる疑問、質問に答える対談で好評のうちに終了することができました。



色絵鳥牡丹文大皿(パートⅦ-71)

柴田 「これは初めて見て、ああ、いいなとおもって……買った物です。」

大橋 「私もこれは大好きで。青手の中では名品だと思います。」



薄瑠璃釉染付桜文折紙形皿(パートⅦ-385)

柴田 「一生の内一回出会いたいと思っていたのが偶然4年ぐらい前に出会って……夢みたいなきことがあるんだなと思って買い求めた製品です。」

シリーズ

やきものの技法 (33)

掻き落し

装飾法のひとつ。中国の磁州窯の作品には、掻き落しによって文様を表わした作例がよく知られている。永青文庫に所蔵される重要文化財の「白釉黒花牡丹文瓶」(11~12世紀)、白鶴美術館に所蔵される重要文化財の「白釉黒花龍文瓶」(11~12世紀)は、磁州窯の双壁として知られているが、ともに鉄絵の具を器面全体にかけてから、文様を鋭い刃物で線彫りし、背景の部分に丹念に掻き落して白地を出し、透明釉をかけて焼成している。

大阪東洋陶磁美術館に所蔵される「白磁銹花牡丹唐草文瓶」は、中国の定窯で11~12世紀に作られた作品と考えられている。それは白磁の表面に鉄泥粧を塗りまわし、その鉄泥粧を薄く掻き落して、白地に銹色の牡丹と唐草の浮き文様を表わしたものである。そして白磁釉を全体に施釉して焼成している。

韓国では11~12世紀の高麗時代の作品で、青磁鉄絵の作品群の中に鉄絵で描かれた葉文様の葉脈などに掻き落しが見られるが、それは掻き落しというよりも線彫りといったほうが適切かもしれない。15世紀の朝鮮王朝時代の粉青沙器に、白化粧した白土を掻き落して文様をあらわした作例を多く見かける。

初期伊万里の作例では、ここに紹介する「染付八卦渦文輪花皿」(柴田コレクションVI-145)がある。生素地に塗り込めた呉須を篋で掻き落して、白抜き算木文様を表わしている。その掻き落した部分はややくぼんでいる。

(吉永陽三)



染付八卦渦文輪花皿 1630~40年代
(柴田夫妻コレクションVI-145)

シリーズ

やきものにみる文様 (33)

小野川関

相撲は弥生時代から五穀豊穰の吉凶を占う農耕儀礼として行われてきたという。さらに相撲は武術として鍛練されるようになった。江戸期には、神社仏閣の建立や修繕の寄付を集めるための勧進相撲から、民衆の娯楽としての相撲に変化していく。宝暦、明和年間(1751~72)には大名抱えの力士も江戸にある師匠の相撲部屋に所属し、訓練されるようになった。この江戸相撲は天明から寛政年間(1781~1801)に全盛期を迎えた。

この頃活躍した力士は谷風、小野川、雷電であり、三人は空前の人気力士となった。谷風は四代、小野川は五代横綱である。二人は、それまで前例のなかった横綱土俵入りをはじめて披露したことでも知られる。このころの相撲熱をあらわすかのように、浮世絵には勝川派の絵師らによる相撲絵がみられる。これらは、「役者絵」のようにプロマイドのようなものであつたろう。谷風や小野川は多く描かれ、その人気をうかがわせる。

浮世絵の影響からか、あるいは支持者からの注文のせい、肥前磁器にもまれに力士を描いたものがみられる。写真の作品は小野川関を描いたもので、丸い窓絵に肖像、軍配、短冊には「小野川」の文字が白抜きであらわされている。染付皿の小野川は浮世絵の相撲絵に描かれたものと風貌がよく似ており、口はへの字口で眉は八の字、眼は下がり気味である。

小野川は本名を川村喜三郎といい、滋賀県大津出身で牛飼いの子であつたという。安永八年(1779)十月に初土俵を踏み、安永十年(1781)に新入幕した。天明二年(1782)には四年間無敗であつた谷風を破り、谷風の好敵手として人気を集めた。谷風も床の間に小野川像を掲げ、小野川の取り口を賞賛したという。身長五尺八寸(約175.7cm)体重三十一貫(116.3kg)。寛政九年(1797)に引退し、抱え大名の久留米藩(福岡県)下屋敷(東京都港区芝)に小野川部屋をひらき、文化三年(1806)に没した。

(藤原友子)



染付窓絵力士牡丹唐草文皿 1780~1810年代
(柴田夫妻コレクションVI-400)